

台北故宮博物院蔵「宋人画千手千眼観世音菩薩」像の淵源について

ら すいじゅん
羅 翠恂 (早稲田大学)

発表要旨

13
時
30
分
—
14
時
10
分松
ヶ
崎
・
西
キ
ャ
ン
パ
ス
内
セ
ン
タ
ー
ホ
ー
ル

台北故宮博物院蔵、国宝「宋人画千手千眼観世音菩薩」像は、南宋12世紀の宮廷周辺で描かれた可能性や、皇帝による国家儀礼で用いられた像と関連する可能性も指摘される、宋代仏教絵画の傑作である。ただし本作に見られる千手観音の図像は、「千手」中の大手と小手の区別を設けず、全ての手を同規模に表して各々に異なる印や持物を表す上に、その中に經典中に見出せない持物も多く含まれるなど、唐末五代までの伝統から大きく逸脱する点が多い。そのことから、本作の図像の意味や淵源はながらく不明とされてきた。本発表では、これまで取りあげられて来なかった類似作例や関連史料を参照しながら、台北像の淵源と信仰背景について改めて考えてみたい。

そのためにまず、「千手」の特異な表現が台北像と近似する作例に注目する。本作の類似作例としてはこれまでに、大足宝頂山第8号龕や安岳仏慧洞の摩崖石刻、および瓜州榆林窟第3窟(2例)や朔州崇福寺弥陀殿の壁画などが紹介されている。しかし実は、同様の表現を採る作例は他にも5点あり、計10点が確認される。注目されるのは、これらが1点を除いていずれも11～13世紀と、宋支配期の作とされる点、そして地理的にきわめて広く分布する点である。この特異な図像が宋に入ってから突然広範囲で見られるようになった背景には、宋以降の観音信仰のあり方や、流行のきっかけとなるような影響力を持つ作品の存在など、特別な事情があったものと推察される。

そこで次に、台北像が制作された背景について文献史料を通して考察する。宋代には、宮廷や皇室が熱心に観音を信仰したことが知られるが、特に上天竺寺など、南宋の都杭州周辺の名刹では、五代十国時代(907-960)に呉越国で活躍した、孔仁謙という名仏師が作ったという観音像がさかんに拝まれていた。一連の像の中でも台北像との関連性において特に注目されるのは、寧波の開元寺にあったという千手観音像である。この像については『宋朝事実類苑』に「千手之制、取於襄州画像、凡五百手各持物器、五百手結印、本神迹也」とあるが、「五百手に物器をとり、五百手に印を結んだ」というかたちは台北像の千手の表現に通じる。また「取於襄州画像」という表現は、この像が当時有名であった特定の画像を手本に作られたことを思わせる。本発表では、この「襄州画像」に関する文献史料を紹介し、その中に記録される千手の有様と台北像の図像とを照合しながら、台北像の淵源に寧波開元寺の像、ならびに「襄州画像」がある可能性を論じたい。さらに、宋代の襄州知州が襄州の像をたびたび訪れて雨乞いを行っていたとの記録があることから、当時この像が降雨を招くなど、天下の和気を招いて農事を進行させるような力があるものとして信仰されており、開元寺像や台北像、ならびに近似した図像を持つ他の作例についても、同様の功德が期待されていた可能性を指摘したい。